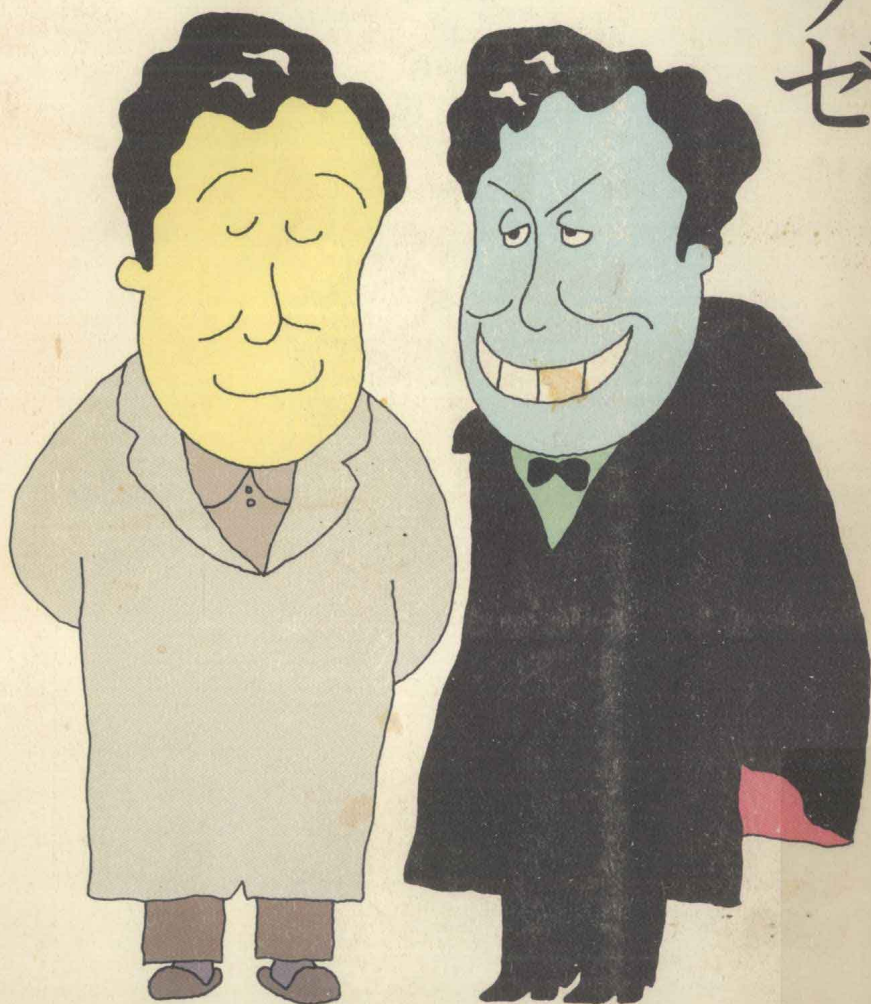


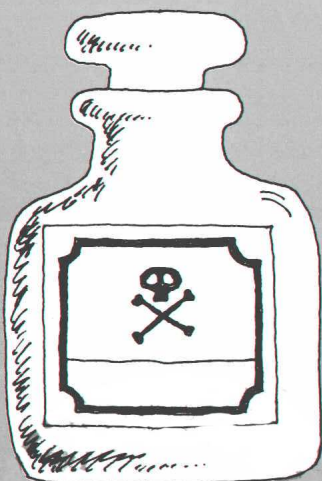
マンボウ博士と怪人マブゼ

北 杜夫



怪人マブゼと博士ウ

北 杜夫



新潮社

マンボウ博士と怪人マブゼ

定価六八〇円



発行 昭和五十三年十一月二十日
四刷 昭和五十四年三月十日
著者 北杜夫（きたもりお）

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

162 東京都新宿区矢来町七一 振替東京四一八〇八
電話 業務部 03 (266) 五一二 編集部 (266) 五四一一
印刷所 株式会社光邦
製本所 株式会社大進堂

©1978 Mario Kita, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替いたします。

目次

怪人マブゼ博士 七

I

悲しい悪魔 一四

たった三つの言葉 一九

ボロ靴にたたられた男 三

痩せる薬 四三

タバコの元祖の話 五

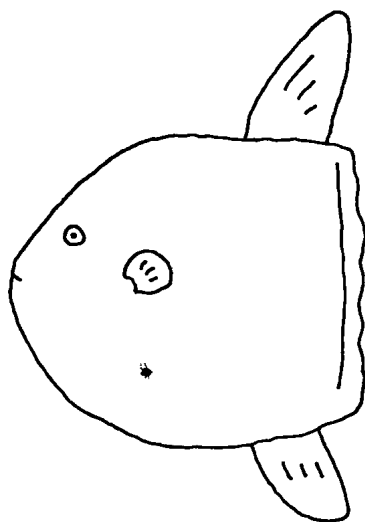
II

タキシード哀話 三

チロル紀行 六

私のおそまきの青春 八五

ストレスのことなど 九



乳離れしない現代の青年たち 九四

恋愛と結婚は別か 九

思ひ出の外国童話 一〇四

なつかしの児童マンガ 一〇九

Ⅲ

私の文章修業 二六

盗みと下敷き 二〇

原稿用紙 二三

「マンボウもの」の発生について 三八

Z旗あげて——執筆五分前 一三〇

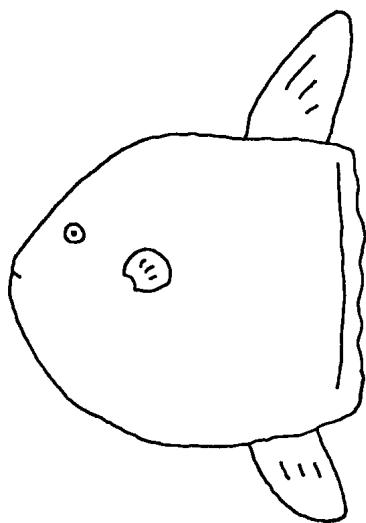
*

柳川など——北原白秋文学紀行 一三三

上山など——斎藤茂吉文学紀行 一四三

二上山など——釈迦空文学紀行 一四九

紛失したおハガキ——高村光太郎氏 一五六



初期作品の思い出など——三島由紀夫氏 一五

野田岩のウナギ——舟橋聖一氏 一六

宇宙人の優しさ——埴谷雄高氏 一四

もてすぎる——吉行淳之介氏 一六

興味深い芸術家観——矢代静一氏 一六

『間切りの孫二郎』への期待——なだいなだ氏 一七

ムツゴロウ共和国——畑正憲氏 一七

初期の抒情性とユーモア——ドストエフスキー 一七

塵のような雑々話——トーマス・マン 一八

IV

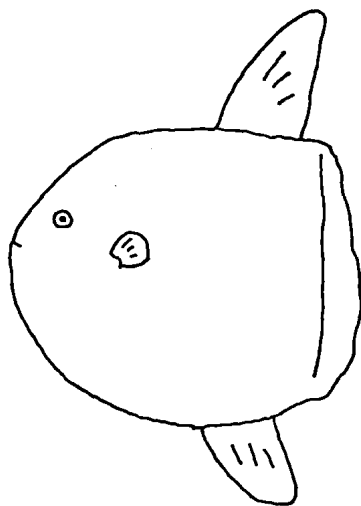
原っぱ・墓地・書物 一八

出羽嶽 一八

先生 一九

受験 一九

遊びについて 一九



いろんな冒険 一九七

平和 一九九

あやまることの大切さ 二〇一

私の好きな言葉 二〇三

リュウベック再訪など 二〇四

身体検査 二〇七

十四年後 二一〇

精も根も尽きはてるの記 二一四

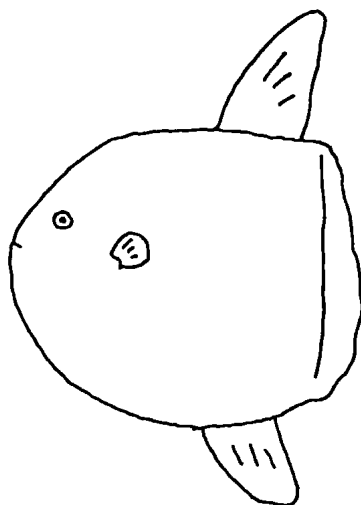
プロ野球 二一八

くたばれジャイアンツ 二二〇

相当にうらぶれてきたこと 二二四

五つ同時進行——睡眠十分前 二二七

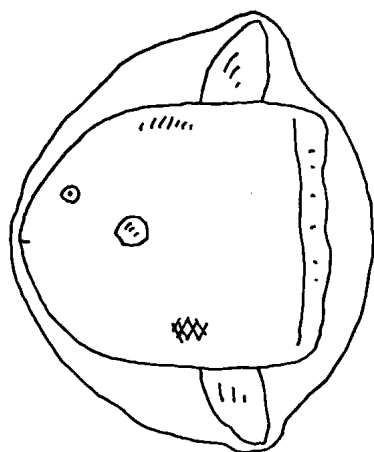
天国へのフルコース 二三九



マンボウ博士

と

怪人マブゼ



怪人マブゼ博士

数年前の、たしか冬の初め、私はテレビで「怪人マブゼ博士——怖るべき狂人」という映画を見た。

そして、その映画がひどく気に入り、いわばマブゼに憑かれてしまった。というのも、当時、私は悪性躁病さうびょうのまっ盛りの時期で、かなり異常であったからだ。

マブゼ博士というのは、大正時代、「カリガリ博士」なみに有名な無声映画で、フリッツ・ラング監督（この名はウロ覚えであやしい）はその後もずっとマブゼ・シリーズを作った。アメリカへ行ってからも、トーキーでマブゼものを作り、他の監督によって作られたものもある。

初めの作は、「ドクター・マブゼ。デル・シュピール」という題名だったが、昭和十何年かに作られたものを私は見たわけである。

マブゼ博士は特別あつらえの大犯罪者で、世界征服をはかったりする。しかし、その「怖るべき狂人」のあら筋をいうと、前から獄につながれ、今は発狂して、精神病院の一室に監禁されている。

だが、あくどい犯罪が続発し、その手口がマブゼ以外にあり得ない、と警部は判定する。そこで精神病院へ行ってみると、鍵かぎのかけられた個室の中で、マブゼは完全に狂人の形相で多くの紙

に矢継ぎ早に出鱈目な図型を描いてはほうり散らしている。病院長もマブゼは病院から一步もでないと断言する。

念のため警部はマブゼの部屋に見張りをつけるが、なおかつ巧妙な犯罪は続出する。

見ていて私は、精神病院長がマブゼの部下で、外部にいる手下に連絡しているのだと思った。彼がマブゼを診察するため、一人きりで院長室に入れたりしたからである。

ところが真相は、その病院長はまともな学究なのであった。彼はマブゼの症状に興味を抱き、催眠術をかけてその深層意識をさぐろうとする。また、マブゼの描きなぐった出鱈目の図をも、珍しい狂人の資料として保管している。

ところが、マブゼは怖るべき存在であった。彼は気が狂っていなかった。催眠術をかけている病院長のほうが、実はマブゼに術をかけられ、あやつられていたのである。出鱈目に見える図は、卓抜な犯罪計画の暗号指示であり、病院長は自分では知らずに、その紙片をマブゼの部下に手渡していたのだ。

私は、躁病で発狂中と称して威張っていたため、おそらくテレビ会社が勝手につけたらしいこの「怪人マブゼ博士——怖るべき狂人」という題名と内容が、どえらく気に入ってしまった。

「どくとるマンボウ」なんて名前は、平凡でつまらぬと思った。そこで、少なくとも発狂中は、自ら「どくとるマブゼ」と名乗ることにし、その旨、紙に書いて応接間に貼^はりだした。そして、「怖るべき狂人」とは、まさしくおれのことだと悦に入っていた。

更に私は、大オウチのくせに、ある夜、「マブゼの唄」なるものを作りだした。

あたちの名前はマブゼだじよ

どうだ皆ちゃんこわいだろ

西の国から東の国

マブゼマブゼで日が暮れる

この唄を、面妖な節まわしで夜中のベッドの上でうたっていると、なにせ相当に頭がヘンになっているため、これはレコードに吹き込んで売りだすべきものだと思われる。それで、他のおかしい唄や独白や効果音を自分一人でがなったり呟いたりして、テープに吹き込んだ。なんとそのテープが六巻にもなった。

娘はおもしろがったが、女房の迷惑と心配はかなりのものであったらしい。

しかし、躁病が収まってしまうと、さすがに恥辱の念に頭をかかえ、テープを入れた箱を見るのさえイヤになった。その最中は、くる人くる人にテープを聞かせて得意になっていたのだが。これは昔の夢である。悪夢のようなものである。

最近二年近くも、私は躁病といえるほどの状態にならない。体力が非常に弱まって、半病人といえる時期ばかりがつづいている。鬱の期間はずっとふえ、仕事もなかなかできない。少し元気がでて、以前ならこれから躁になるべきところなのを、体調があまりにわるいため、さながら石のオモシをつけられたように、またズブズブと鬱の中へと沈んでいってしまう。

私がまったく気力を失い、口もよう利けないでいると、ときたま娘が、
「パパ、またマブゼをやろうよ」
と言う。

なんともいえぬ気持で私はそれを聞く。

(追記) ずっと躁病になれずにいた私は、一昨年アフリカ旅行から帰ったとたん、実に五年ぶりに躁病になった。五年ぶりだけあってまさしく悪質で、その度合もひどかった。ただの躁病ならどうということもなく、声が大きくなったり、人の悪口を言ったりする程度なのだが、このときは一切が常軌を逸していた。二階の書斎に駆けあがり、何をしにきたのかも忘れてしまつて、また駆けくだつてつまずき、階段に積んである本がガラガラと崩れ落ち、その下敷になつて悲鳴をあげたことが以前にあった。そうしたことを警戒して、今回はのろのろと階段を登り降りすることにしたが、一度電燈をつけ忘れ、上段でひどく向う脛すねを打つたりした。

それより、私は株をやりはじめた。ギャンブルは好きだが、日本にはカジノがない。その代用品といつてよかつた。ところが、私が株を買うとふしぎに暴落が始まる。このときもそうであつた。以前の私ならそのままに放置しておくところだが、なにせ活気盛んの折であつたから、半分に値下がりした優良株を叩き売り、仕手株に乗りかえ、それが上つてゆくと、おれは株の天才だと思ふようになり、ついには信用取引で毎日売り買いをするようになった。正直にいつて、私の全財産はどうに尽きていた。ところが株式の短波放送を聞いていると、遮しや二無む二その日の上昇株を買いたくなくなつて、電話で注文してしまう。手持の金はまったくない。そのため、私は少しでも関係ある出版社から莫大な前借りをし、ついには先輩、友人、母からも能うかぎりの借金をするようになった。

これは今考えると、悪夢のようである。原稿を書いても、本が出版されても、前借りをしているため、一文も出版社から金はいらない。そのため私は苦手の連載対談を某女性週刊誌に引受

けることにした。車の中でキャッシュで対談料を受けとる。それを家に持って帰ると、妻は手刀を切ってそれをとり、生活費に当てるのである。

そんな切羽づまった生活を続けていても、食生活などを切りつめる気には私はならなかった。客がくれば洋酒を出す。つまり、私の赤字は何千万円にも達していて、たかが何百円のケチをしなくても致し方がないと思ったのである。

のみならず、私は株が当り、以前よりもっと小金持になれるという幻想を捨てきれなかった。なんと、その当時、私は某夕刊紙に株式評論を書いていたのである。それも金のためというより、自分がそこらの株式評論家より頭がいいという妄想にとりつかれていたからだ。

しかし、株はさんざんの結果で終わった。翌年の三月、南米旅行へ行くため精算をして行ったのだが、前借り、借金を払うとあとゼロになった。つまり、私は十年間にコツコツためた財産をすべて失ったのである。あまつさえ、まだ母からの借金など残っている。

だが、躁病のときはそんなことはへのカッパなのだ。その当時、私は一度も後悔しなかったし、口に出して言うには、「男は三度生涯に苦労しなくてはならぬ。おれの最初は戦後の食糧難だ。今度は金のことだ。もう一度、次は女の苦労もしなくちゃなあ」とか、豪語とか威張っていた。

その年の大晦日^{みせか}、私は十一月の千万を越える税金を滞納していたのだが、十二月三十一日に銀行から金を借りることができ、やっとそれを払った。紅白歌合戦は嫌いだから、寝室にこもってコント55号を見ていた。やがて除夜の鐘である。出前のテンブラそばがとどいた。私は家人と一緒にそれを食べ、なにがなしの幸福感を味わった。

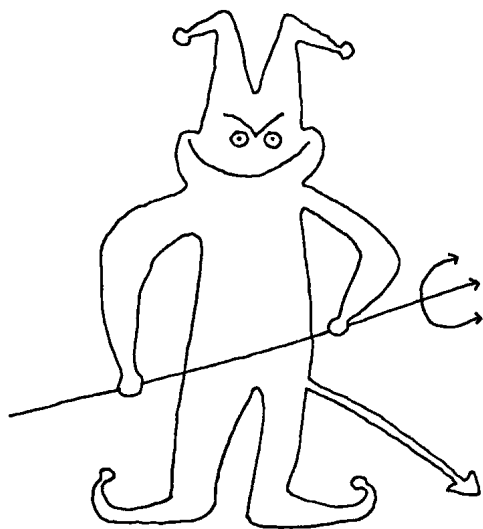
「当家の主人、只今発狂中」という札を前から作っていたのだが、娘はそれをさかんに門に貼りがった。

「正月の朝、貼ろう」

と、私は言った。

怪人マブゼ博士には及ばないが、それに近い人物になったと私はそのとき真剣に考えていた。

I



悲しい悪魔

一人の悪魔がおりました。あまり偉い悪魔ではなく、むしろ下っぱの悪魔で、地獄でもボウボウ火を燃やすカマドに、石炭を投げこむ役をやらされておりました。

立派な悪魔は、人間の世界へ出かけて行って、人間の魂を買います。その代り、人間の願いをかなえてやります。その人間は生きているあいだは、悪魔の魔力によって、大金持になったり、美しい女性を妻にしたりすることができですが、契約期限がくると、魂を奪われて地獄へ落ちてしまうわけです。

みなさんも、ゲーテの『ファウスト』はご存知でしょう。ファウスト博士は、凄く偉い学者で、あらゆる学問を修めましたが、老境になって、この世のすべてがむなしく、もの足りなくなり、ついに悪魔と契約を結びます。そして、悪魔の力によって、すばらしい旅をしたり美女と恋したりするわけです。『ファウスト』一部は、みなさんも、もしまだお読みになっていなかったとしたら、ぜひ読んでください。すばらしい戯曲です。ただ、その二部はかなりむずかしい本といえます。

それはともかく、先ほど述べた小物の悪魔も、ようやく^{ばってき}抜擢されて、人間の世界へ出かけられるようになりました。